

U 国 語 問 題

注 意

- 一 試験開始の指示があるまでこの問題冊子を開いてはいけません。
- 二 解答用紙はすべてH Bの黒鉛筆またはH Bの黒のシャープペンシルで記入することになっていきます。H Bの黒鉛筆・消しゴムを忘れた人は監督に申し出てください。
(万年筆・ボールペン・サインペンなどを使用してはいけません。)
- 三 この問題冊子は16ページまでとなっています。試験開始後、ただちにページ数を確認してください。なお、問題番号は1〜3となっています。
- 四 解答用紙にはすでに受験番号が記入されていますので、出席票の受験番号が、あなたの受験票の番号であるかどうかを確認し、出席票の氏名欄に氏名のみを記入してください。なお、出席票は切り離さないでください。
- 五 解答は解答用紙の指定された解答欄に記入し、その他の部分には何も書いてはいけません。
- 六 解答用紙を折り曲げたり、破ったり、傷つけたりしないように注意してください。
- 七 この問題冊子は持ち帰ってください。

マーク・センス法についての注意

マーク・センス法とは、鉛筆でマークした部分を機械が直接よみとって採点する方法です。

- 一 マークは、左記の記入例のようにH Bの黒鉛筆で枠の中をぬり残さず濃くぬりつぶしてください。
- 二 一つのマーク欄には一つしかマークしてはいけません。
- 三 訂正する場合は消しゴムでよく消し、消しすぎはきれいに取り除いてください。

マーク例

①
○ 1
○ 2
● 3
○ 4
○ 5

(3と解答する場合)

— 左の文章を読んで後の設問に答えよ。(解答はすべて解答用紙に書くこと)

いったい人間と機械とはどこが本質的に異なるのだろうか。かつて、人工知能は「人工頭脳」とよばれていたこともある。人間は脳で思考する生物であり、だから機械で脳をつくれればよいというわけだ。脳というのは、普通のコンピュータとはかなり構造がちがう。コンピュータは、原則として二つの入力信号に応じて一つの出力信号を出す論理回路(たとえば入力信号が1と1のときのみ出力信号が0で、あとは1というNAND回路)の組み合わせからなる。一方、大脳皮質には百四十億個くらいの神経細胞があり、それぞれからシナプスという出力端子が一本ずつのびて、神経細胞どうし密につながっている。一つの神経細胞には他の数千〜数万個の神経細胞からのシナプスが接続されており、多入力一出力系をつくっている。シナプスには興奮性(プラス)と抑制性(マイナス)のものがあり、入力信号の総和が一定の閾値をこえると出力信号が発火する。つまり、脳では無数の神経細胞がチカチカと発火している。多様な発火パターンが思考をつくっているのだ。

こういう構造をもつ人間の脳が「心」を生んでいるとすれば、同様な多入力一出力系の機械をつくれれば、それは「心をもつ機械」となるのだろうか。技術的には、脳に似た構造の多入力一出力機械をつくることはそれほど困難ではない。事実、それは「^(注1)ニューラルネットワーク」とか「^(注2)コネクショニズム」とか呼ばれ、長いあいだ人工知能の分野で研究されてきた。しかし、その実験機から満足のいく「心」が生まれたという話はいつこうに聞かないのである。ということは、もしかしたら、「心をもつ機械」をつくるためのこういうアプローチには、どこかに根本的な勘違いがあるのではないだろうか。

「クオリア」という言葉がある。「感覚質」などと訳されるが、われわれ一人一人が知覚器官に刺激をうけて主観的に感じとる、固有の質的体験のことだ。たとえば、筆者が朝起きて駅にいそぐ道ばたに真つ赤なバラが咲いていて、ハッと心を奪われたとする。そのバラのあざやかな深紅の色合いがクオリアである。そのとき、筆者の脳内ではどこかが発火していただろう。計測器をつければ、どの部分がいかに発火したか、血流パターンなどが

ら詳しく推定できるかもしれない。だが、大切なのは、そういう脳内プロセスの科学的記述と筆者がえたクオリアとは、決して同一ではない、ということだ。あえて言えば、前者は三人称的（客観的）、後者は一人称的（主観的）にしか語れない。もし仮にまったく同じ発火パターンを再現できたとしても（そんなことは事実上不可能だが）、それが同じ「深紅」のイメージを筆者の心にもたらすとは限らない。「絶対に同じはずだ」と言われても、筆者が「いや、やっぱり違う」と答えればそれで終わり。筆者の「誤り」を正すことなど誰にもできないのである。「私のリアル」とはまさに主観的なものだ。喜んだり怒ったり悲しんだりした体験のイメージが、人間の心のなかでスウヨウな部分をしめている。それが「私のリアル」をつくっているのであり、ベースにはクオリアがある。

ではクオリアはいつたい、いかにして出現するのか？ 脳とよばれるあのヘンテツもない一塊の白い物質から、いかにして個人的な体験世界が立ちあがるのか？——まさにこれは二二世紀の難題に他ならない。ヒントが一つある。「身体的自己」だ。これは自分の体験についての直感的印象のまとまりのことである。

「私（自己）」とは言語的自己と身体的自己の緊密な結合である。だが、現代人は言語的自己が肥大しており、いつのまにかそれが独立し「人格」を名乗って一人歩きしはじめる。言語とはもともと共同性（他人に通じる一種の客観性）をもっているから、いつのまにか主観的な「私（自己）」自身さえ、論理的・客観的に記述できるような気がしてくる。⁽²⁾それが「思考機械」という奇妙な幻想をはぐくむのだ。もう二十年ほど前になるが、米国のある高名な人工知能学者が来日して、筆者はテレビでインタビューしたことがある。そのとき彼は妙なことを言った。「大切なのは脳です。たとえばサルにピアニストの脳を移植したとすれば、サルもちゃんとピアノを弾くでしょう……」

時間がなくて反論できなかったが、ひどい違和感を覚えた。サルの指のかたちや強さは人間のピアニストとは随分ちがう。ピアニストの脳から敏感な信号がサルの指につたわっても、絶対にうまく弾けるはずはない。それにもともと、サルの脳はその身体つまり内臓や筋肉骨格と連動しているから、ピアニストの脳を移植すれば、サ

ルはすぐ死んでしまうだろう。脳はコンピュータ、手は周辺機器のようなものであり、だからピアニストのソフトウェアをトウサイすればピアノ演奏を聴けるはずだ——これこそ、西洋の伝統的な人間機械論の二〇世紀版でなくて何だろうか。こういう身体無視のばかげた発想にもとづくかぎり、クオリアの正体はわからないのだ。

考えてみよう、言葉をもたない動物にもクオリアはある。犬や猫は、「自我意識」はなくても「知覚意識」をもっており、周囲環境の刺激に敏感に反応して行動する。ヒト以外の生物は、いわば身体的自己だけで生きているのだ。心と脳の関係をあつかうときは、両者のあいだに「身体」という中間項をはさまなくてはいけない(より正確には、脳を「身体の一部」ととらえるべきなのだ)。これと関連して大切なのは、「感情(情動)」である。センレツなバラの色からえられるクオリアが、理性というより感情とむすびついていることは明らかだろう。そして感情は身体から生まれるのである。

古い人工知能の理論では、脳で感情が発生し、それが身体に伝わると考えられていた。しかし、最近の脳科学研究はむしろ、身体が感情の原器であるとみなしている。「怖い」から脚がふるえるのではなく、まず全身の身体的反応があり、その結果を「怖い」と言語的に表現しているのである(これは昔から知られていたが、現代の脳科学者が実証した)。このことは、ヒト以外の生物を考えれば納得がいく。言語的自己をもたない動物も、危険におちいると全身をふるわせる。そういう無意識的反応がクオリアにつながっているのではないか。

(西垣通『ネットとリアルのあいだ』による)

(注) 1 ニューラルネットワーク——人間の脳の神経回路の仕組みを模倣した情報処理機構のこと。

2 コネクショニズム——神経回路という制約を重視して人間の認知や行動をモデル化しようとする考え方。

3 人間機械論——人間の活動は機械と同じように物理的原理から説明できるとする考え方。

問

(A) 線部(イ)～(ニ)を漢字に改めよ。(ただし、楷書^{かいしよ}で記すこと)

(B) 線部の読みを、平仮名・現代仮名遣いで記せ。

(C) 線部(1)について。このようにいえる理由は何か。その説明として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 全く同じ発光のパターンが再現されたように見えても、必ず誤差ができるので、同じとは言いきれないから。

2 クオリアを科学的に再現するには、まだ研究が不十分であり、それが主観的に「誤り」であると証明できないから。

3 クオリアとは、主観的な体験なので、科学的な記述を行って再現しようとしても、本来不可能だから。

4 全く同じ発光のパターンによって同じクオリアを客観的に作ることは、事実上きわめて難しいから。

5 「私のリアル」であるクオリアの体験は、三人称の形で客観的に記述することしかできないから。

(D) 線部(2)について。筆者がこのように考える理由の説明として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 主観的で身体的な体験である思考が、人格という形をとって再現可能だという前提に立って考えてしまっているから。

2 言語的自己は身体的自己と本来一体ではないので、主観的な体験である思考が客観的に記述可能であると考えてしまっているから。

3 主観的な体験であっても、すべて身体的な共同性の上に立っているという、言語的自己が肥大した考え方をしているから。

4 言語的自己が身体的自己よりも肥大した結果、共同的な体験も、主観性の中で記述可能であると考えてし

まっているから。

5 言語的自己は主観的な「私」の体験も客観的な記述が可能であるかのように考えてしまっているから。

(E) ——— 線部(3)について。これは具体的にはどうということか。左記各項の中から最も適当なもの一つを選び、番号で答えよ。

1 脳さえ安全に移植できて、身体のサイズなどの条件が整えばサルがピアノを弾くのに問題はないという発想。

2 サルの内臓や筋肉骨格に配慮すれば、ピアニストの脳の移植の結果は必ずうまくいくという発想。

3 移植した脳と身体はそれぞれ部品として機能するので、ピアノを弾くのに問題はないという発想。

4 サルの身体にピアニストの脳を移植しても、ソフトウェアとしての身体はピアノ演奏ができるという発想。

5 ピアニストの脳とピアニストの身体は連動し、機能的に分かちがたく結びついているという発想。

(F) ——— 線部(4)について。筆者はここでいう「心」と「脳」と「身体」の関係を、どのようにとらえるべきだと考えているか。左記各項の中から最も適当なもの一つを選び、番号で答えよ。

1 「私」という心は、身体的自己によって形づくられるので、脳には重要な意味はないと考える必要がある。

2 人の心をクオリアからとらえるためには、身体の知覚や反応との関係の中で、脳の活動を考える必要がある。

3 感情は身体から生まれるからこそ、脳の活動が中心となって、心を形づくる関係を重視する必要がある。

4 身体的反応は脳の思考と無意識につながっているので、心は脳のクオリアをベースとしてとらえる必要がある。

5 言語的自己としての心が肥大している現代人は、身体を通さなければ脳を理解できないという傾向に注意する必要がある。

(G) 左記各項のうち、本文の趣旨と合致するものを1、合致しないものを2として、それぞれ番号で答えよ。

イ 言語のもつ共同性は主観性と客観性をつなぐので、クオリアから心の姿を探るとき、重要な鍵となることが期待される。

ロ クオリアから身体的自己を出発点としてとらえられれば、「思考機械」によって心を生み出すことは可能になるはずである。

ハ クオリアにとって身体的自己は言語的自己よりも本質的であるので、心のあり方を三人称的に記述しようとする、重大な自己矛盾に陥る。

ニ 人間の脳の神経回路の構造は、未だ充分には解明されていないため、あらゆる「心をもつ機械」を作る試みは失敗してきた。

ホ クオリアが一人称的にしか語れない理由は、個人的な体験世界は主観的な現象なので、客観的に語る事が不可能だからである。

二 左の文章を読んで後の設問に答えよ。(解答はすべて解答用紙に書くこと)

社会学には人間の行動をめぐって相異なる二つの見方があるといわれます。第一の見方は人間の行動を主体の自由な意思決定の所産とみなすもので、M・ウェーバー(注1)の方法論によって代表されます。ここでは「その人はなぜそのような行為を選択したか」という問いが主要な問いとなります。これに対し第二の見方は、人間の行動が社会の強制力の支配下におかれていることを強調します。この見方によれば、人間の行動は結局のところ社会による決定の所産であるということになります。この見方は、ウェーバーと並んで近代社会学の祖といわれるE・デュルケームの方法論によって代表されます。(注2)

第一の見方をとるとき、人間の行動 (behavior) はしばしば行為 (action) とよばれます。すなわち行為とは、行動が主体の意思決定の所産であることを強調する際に用いられる用語です。行動という言葉を用いるとき、語りは、それが主体の意思決定によるのかどうかということの問題にしない地点に立っています。これに対し行為という用語を用いるとき、語りは手はまちがいない、その行動が主体の選択したものであることに強調をおきながら話をしています。ここでもこの伝統的な用語法に従いたいと思います。つまり人間のふるまいをどちらかといえば外側から客観的に語ろうという意図の下では、「行動」を用いることにし、主観に着目してそれを語ろうとするときには、「行為」を用いることにします。

さて二つの見方のちがいを際立たせるために、「授業に出席する」という行動を例にとってみましょう。第一の見方に立つなら、この行動は行為者自身が自ら意思決定して行っていることにほかならず、どのような理由でその決定が行われたのか(なぜその行為が選択されたのか)が問題になります。単位が必要だからなのか、授業に出ることは学生のつとめだと思っっているからなのか、それとも単純に授業が面白いからなのか。ともかく主体自身が行動を決めているということが大前提です。これに対し第二の見方を採用するなら、「なぜ出席するか」という問いは、「なぜ特定の時間・特定の場所に複数の学生がいるのか」という問いとトウカ(4)だと考えられます。

そしてその問いへの答えは簡單明瞭です。すなわち授業時間割（という規則）があるから、というものです。授業への出席という行動は、主体の自由な意思決定の所産というより、規則による強制の所産として語られるわけ
す。

人間の行動に関するこうした二つの見方を可能にする視点を、それぞれ個体主義的な視点および総体主義的な視点とよぶことにしましょう。

個体主義の立場は行動を主体の自由な意思決定の所産と考えるわけですが、そこで主として念頭におかれているのは、利害計算あるいは自らの信念に基づいて意思決定を行う主体です。主体は特定の状況下で利害損得を計算したり、ものごとの善悪正邪を判断した上で何らかの決定を下し、行動する。これが個体主義的視点の想定している人間の行動のありようです。意思決定が利害や理念に依拠して行われる限り、その過程を言語によって（事後的に）再構成すること、すなわち説明することは可能です。説明が可能であるような意思決定は「合理的」とよんで差し支えないでしょう。どのようなトツピな理念に基づく決定であろうと、その過程が事後的に再構成可能ならば合理的といえるのです。

□ 人の決定はつねにこの意味で「合理的」であるわけではありません。作曲家の頭にメロディがふいに浮かぶ、といったことを考えてみればよいでしょう。メロディの決定は作曲家自身のものですが、彼はその過程を合理的に説明することはできません。だがこうした「非合理的」な決定は、決定過程についての推論自体が不可能であることに加え、ささいな現象しか導かないから、視野の外においてかまわない。個体主義の視線はこのような理由で視野の限定を行います。視野のうちに入ってくるのは、もっぱら説明可能な決定であり、その主体としての合理的な人間です。思考や計算のプロセスは行為者本人のもので、合理的な意思決定に注目する以上、行動が自己決定に由来すると考えるのは当然のことでしょう。

総体主義の視点をとると、今述べたような個体主義的な行動把握はあまり意味がないようにみえます。たしかに総体（社会）は人間の行為の集積の上に成立しますが、それは一個の全体としてつねに部分（行為）の総和以上の

ものです。それゆえ個々の行為に関与する意思決定のプロセスが明らかにされたとしても、それだけでは社会についての情報が蓄積されたことにはなりません。認識の方向はむしろ逆であるべき、と総体主義の立場に立つ人は考えます。すなわち個々の意思決定の過程がいかに社会による拘束の下にあるかを明らかにすること、これが社会学的認識の課題となります。行為者の行為が社会を構成していくという側面ではなく、社会が行為を産出するという側面にこそ光があてられなくてはならない。総体主義的視点はこのような関心から人間の行動が社会的・制度的な拘束の下にあること、そしてその外には出られないことを明らかにします。この視点に立つなら、人間の行動を説明するのは、行為者本人の思考や計算ではなく、行為者にガイザイする（広い意味での）制度であるということになります。

（高橋由典『社会学講義』による）

（注） 1 M・ウェーバー——ドイツの社会学者・経済学者（一八六四—一九二〇）。

2 E・デュルケーム——フランスの社会学者（一八五八—一九一七）。

問

(A) 線部イ、ハを漢字に改めよ。（ただし、楷書で記すこと）

(B) 空欄□にはどんな言葉を補ったらよいか。左記各項の中から最も適当なもの一つを選び、番号で答えよ。

- 1 こうして
- 2 むろん
- 3 たとえば
- 4 むしろ
- 5 さて

(C) 線部(1)について。これは具体的にはどのようなことか。その説明として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 1 社会や制度からいったん切り離された人間の行動のみに着目する。
- 2 社会的に重要な意味をもつ人間の行動のみに研究関心を抱く。
- 3 一般的な人間の行動ではなく、特殊な人間の才能のみを分析しようとする。
- 4 合理的な意思決定に基づく人間の行動のみを観察の対象とする。
- 5 事後的に明らかとなる理念のみを人間の行動原理としてとらえる。

(D) 線部(2)について。これを本文の内容に即して言い換えるのとどのようになるか。左記各項の中から最も適当なもの一つを選び、番号で答えよ。

- 1 社会はその構成員である個人々の意思決定をすべて承認するわけではない。
- 2 社会が個々の行為に影響するというだけでなく、その逆もありうる。
- 3 社会は個々の行為に関与する意思決定のプロセスに還元されえない。
- 4 社会には多くの個人がいるから、そのすべての行為は把握できない。
- 5 社会を構成する個々の行為は、固有の論理に従って増殖してゆく。

(E) 本文中の「主体の自由な意思決定」に関して述べたものとして、最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 1 自由な意思決定に基づく行動には、客観的な側面が欠けている。
- 2 自由な意思決定は、常に合理的な行動と結びついている。
- 3 自由な意思決定のプロセスは、本人だけが合理的に説明できる。
- 4 自由な意思決定は、規則に合致する行動にも見出すことができる。
- 5 自由な意思決定は、主として人間の経済活動において見出される。

(F) 個体主義的な視点と総体主義的な視点に関する左記各項のうち、本文の内容と合致するものを1、合致しないものを2として、それぞれ番号で答えよ。

イ 個体主義的な視点は、総体主義的な視点とは異なり合理的な内容をもつ。

ロ 総体主義的な視点は、制度が人間の行動を規定していると考ええる。

ハ 社会全体を扱う社会学には、総体主義的な視点の方が適している。

ニ 個体主義的な視点は、「なんとなく授業に出席した」人の行動を説明できない。

ホ 個体主義的な視点と総体主義的な視点は、行為と社会の認識の方向について逆の立場をとっている。

三 左の文章を読んで後の設問に答えよ。(解答はすべて解答用紙に書くこと)

我が住む里中に大きやかなる犬の白き毛なるあり。いみじう年の老いにたるにや、毛ぬけてきたなげなる骨出で、瘦せさらぼひよろめきありくさまは、「累々として喪家の犬の如し」といひけるも、かかるかたちには。今は門をもちて吠え、人を迎へて尾をふるのつとめも得せず。まして一陣をかきありきて敵の虚実をしり、千里にかけ行きて主の音信をなすの達者わざは思ひたえたり。さるを情しらぬわらべどもの、縄にて足を繋ぎて引きずりもて行くに、ものむつかしく、ねたげにしたがひゆくこそ便なけれ。ただ常には家々の戸のかたはらに、尾とかしらと三輪くみて静かにうち眠れるに、修行者の鉦ならし行くを聞けば、やがて身ふるひ起きて、その鉦の音につれて高く吠えて、その僧のうしろに立ちそふは念仏となふるならん。さるものの耳にも、鉦の音よくも通じて、声を合はずだふとき。たまたま鐘声をきくに、「あなかしがまし」といとひて、後世のことつゆわきまへしらぬ人には遥かに勝るべし。あした夕べをいはず、草庵にありて、粥にもあれみそうづにもあれ、かならず一杯をあたふるを待つとて、そのほどをかうがへ覚えて庭につくばひ居ぬ。かく有るかなきかの住居をさへ、たのみおもひたる風情もあはれに、もし日頃やましげに物くふこともあらねば、小豆を煮てくはしめ、蠅にくるしむを見ては、たばこ草の茎をあみてこれにまとはしめけるに、この一日二日は来らず、いかにしけるぞやと心もとなきに、あたりの廁の瓶にはまりて、飛び上がらん力もあらずして、そのままにたふれぬと聞くに、今さら老いゆくすゑの人のさまもさなんとうしろめたし。されども、称名念仏の功德には、その糞瓶の中より蓮花化生し、即転畜身うたがふべからずと、魂まつる今日しもおもひいでて、

① 白よ白くらへ垣根の萩の花

(『蝶夢和尚文集』による)

(D) 線部(3)は何を指しているか。最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 1 犬
- 2 わらべども
- 3 修行者(僧)
- 4 人
- 5 筆者

(E) 線部(4)は何について述べているのか。最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 1 時間
- 2 距離
- 3 広さ
- 4 年齢
- 5 身分

(F) 線部(5)の現代語訳として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 1 恨めしげに
- 2 まずそうに
- 3 元気なく
- 4 遠慮がちに
- 5 思う存分

(G) 線部(6)の現代語訳として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 1 いらいらしていると
- 2 あせっていると
- 3 気に掛けていると

- 4 放っておいたところ
- 5 忘れていると

(H) 線部(7)について。

(甲) 「さ」が指している内容として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 1 老後の後生願いによって極楽往生できる
- 2 日頃の食養生で寿命が左右される

- 3 社会に貢献しないと幸せな老後を送れない
- 4 無慈悲な者はいずれ不幸な死を迎える

- 5 人は誰も年老い、無力となって死んでいく

(乙) 「なん」の文法上の説明として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 1 完了の助動詞の未然形と推定(推量)の助動詞
- 2 強意の係助詞
- 3 希望を表す終助詞

(1) 線部(8)の現代語訳として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 1 不安である
- 2 おそろしい
- 3 気がとがめる
- 4 油断ならない
- 5 疑わしい

(J) 文末の①の句に対する評として最も適当なものを一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 老犬に無残な死に方をさせてしまったことで、自責の念に駆られて詠んだ作。垣根の萩の花を手向けて贖罪したのである。

2 盂蘭盆の日に死んだ老犬を思い出し、懐かしんで詠んだ作。好物の煮小豆のかわりに垣根の萩の花を供えたのが風流。

3 老犬に自己投影し、その成仏を祈念した作。餠餅（お萩）ならぬ萩の花を供え、「白よ食べろ」と呼び掛けたところが哀切。

4 極楽往生を願って、死んだ老犬に称名念仏を呼び掛けた作。犬の「白」と供えた「萩の花」が浄土世界をイメージさせる。

5 無残な老犬の死にこと寄せ、人々に称名念仏を呼び掛けた作。念仏の功德で往生し、花も供えられると巧みに唱導する。

(K) 線部(イ)の動作・行為の主体に当たるものは何か。左記各項の中から最も適当なものをそれぞれ一つずつ選び、番号で答えよ。ただし、同じ番号を二度以上用いてもよい。

1 犬 2 わらべども 3 修行者(僧) 4 人 5 筆者